（インターネット・アマゾン本販売紹介より）

「施今墨対薬」紹介　（本文より）

我が模範であり恩師である施今墨先生は,生前に60年あまり医業に携わった。その医術は深く,治療効果は卓越し,旧時,北京四大名医として広く知られていた。

『施今墨対薬』は『施今墨薬対』ともよばれる。1962年初夏,施先生の高弟である祝諶予教授の指導のもと,「対薬」に対し表の形式で整理を行った。これを施先生に校閲,修正していただき,お墨付きを得たのち,北京中医学院(北京中医薬大学の前身)において,『施今墨臨床常用薬物配伍経験集』という小冊子にまとめた。1963年には,医学雑誌『中医薬研究通訊』にその内容が載録された。その後,20数年の検証を経たのち,臨床経験を取り入れるなど手を加えて『施今墨対薬臨床経験集』を編集し,1982年10月に山西人民衛生出版社より出版した。同書は1982年度の全国優秀科学技術図書1等を獲得している。その10数年後,改訂・増補・再編集を行い,書名を『施今墨対薬』に改め,1996年9月,北京人民軍医出版社より出版した。同書は多くの読者を獲得し,1年あまりの間に3たび増刷を行い,読者の要望に応えた。

隣国である中日両国の友好的な往来,学術交流は長い歴史を有している。唐代には鑑真が数々の困難を乗り越えて日本へ渡り,医術・仏教を伝えている。年月の推移にともない,こういった交流は日増しに増加している。今回,東洋学術出版社の山本勝曠社長の丁重なる要請を受け,本書『施今墨対薬』の日本語版を発行する運びとなった。中医事業を広く高揚し,人類に長寿・健康・幸福をもたらし,日本の同士および中医愛好者とのさらなる交流を深めるため,本書がいささかでも寄与できればこれ以上の喜びはない。

呂　景 山
丁丑仲秋　山西中医学院七蝸楼にて

自序(本文より)

「対薬」は「薬対」とも呼ばれる。その起源はいつ頃であるか未だ定説はない。歴史唯物主義と弁証唯物主義の観点にもとづいて,漢代以前からすでに多くの経験が蓄積されてきた。『中薬概論』では「薬物は単味から複合へ,そして複合から方剤が形成された。これは発展の過程である」と述べている。文字に記載されたものを見てみると,最初に『内経』の半夏秫米湯(半夏と秫米の配伍)の胃不和,睡眠障害に対する治療が見られる。また,後漢張仲景『傷寒雑病論』には統計にもとづけば147対が見られる。後世になり薬対は1つの学問に発展した。それを扱った専門書籍には『雷公薬対』『徐之才雷公薬対』『新広薬対』『施今墨薬対』などがある。

『雷公薬対』について『漢書・芸文志』に記載は見られない。梁朝『七録』の中の『本経集注』陶弘景序文に「桐(桐君)・雷公に至り初めて著書に記載した。

『雷公薬対』4巻では佐使相須を論じた」という記述がある。また,『制薬総訣』の序で陶氏は「その後,雷公・桐君はさらに『本草』の内容を加えた。後の『薬対』では主治が広範囲になり種類も豊富になった」と述べている。しかし,惜しいことにこれらの書籍はすでに失われて,現在見ることのできるのは5対のみである。

『徐之才雷公薬対』は『新唐志』によると2巻あったがすでに亡失した。北宋・掌禹錫は「『薬対』は北斉時代の尚書令,西陽王であった徐之才が著したもので,多くの薬物を君臣佐使の配伍法,毒性,配合禁忌,適応症に分類して記載したもので2巻ある。これまでの本草はよくこれを引用するが,治療における薬物の用い方が詳細に記されているからである」と述べている。

『新広薬対』については,宋代『崇文総目輯釈』3巻に『新広薬対』3巻,宋令祺撰との記載があるのみである。『宋史・芸文志』には宋令祺『広薬対』,『通志・芸文略』には3巻,逸と記載されている。

元代以降は目録学上,薬対に関係する記載は見あたらない。すなわち薬対に関する専門書はすでに亡逸してしまったと思われる。

『施今墨薬対』は1958年北京中医学院第一教務長であった祝諶予教授が我々を引率して下京西鉱務局医院で実習を行った際に,詳しく講義した「施氏薬対」100余対を整理して書籍にしたものである。

1961年卒業実習の際に祝先生は私の指導教官であった。豊富な臨床経験の指導を受け,時には施今墨先生の臨床にも同伴して指導していただいた。先生の指導のもとで薬対は100余増えた。これら2人の先生に校閲をお願いし先に『施今墨臨床常用薬物配伍経験集』をまとめることができた。この本は広く大学生,同学者に受け入れられた。増版を行うほどの反響を受けて翻訳もされ広く読まれるに至った。

その後,先生の指導のもとで勉学,臨床を積み重ね,理論との結合をさらに実践した。経験蓄積と資料収集を重ねて1978年に『施氏薬対』を執筆した。祝諶予,李介鳴両先生の校閲,指摘を得て『施今墨対薬臨床経験集』に改名して世に問うた。この本も広く多数の読者,専門家,教授からお褒めの言葉を受けることができた。

中医の大先輩である葉橘泉教授は『施今墨対薬臨床経験集』は興味深い実用意義のある学習資料であり,中薬と方剤学の橋渡しになる」と述べた。周風梧教授は「北斉代にすでに徐之才の記した『薬対』があったが,惜しいかな紛失してしまった。呂景山先生は施先生および諸先輩の経験を整理してこの書物を著した。本書は南北朝から現在に至るまでの千四百多年に渡る薬物配合に関する知識経験伝達の空白を埋めるとともに,今後の発展を促す意味で臨床において極めて重要な指導書である。祖国の豊富な伝統医学に1つの意義のある貢献をするものである」と述べた。李維賢教授は「薬対」は新興学科であり薬対学と称するべきであると考えている。李教授は「薬対学は薬物学と同じではない。薬対は簡単な配合のみで薬方(方剤)とも異なる。薬対学には方剤学のような配合の完全性はない。薬物学から方剤学を学んだのみでは,方剤学を離れてよい処方をなすことはできない」と述べている。葉廷珖教授は「本書は施先生の薬対配合を集めて詳しく解説したもので,その数も多く分類も詳細になされて調べるにも便利である。薬物単味の効

用,配合による効能および臨床応用まで記載されて,系統的かつ科学性を持ち合わせている」と述べている。唐代・孫思邈の『千金方』には「大医になるには素問,甲乙,黄帝針経.....本草,薬対および張仲景,王叔和の著書を熟読しなければならない」という記載も見られる。

本書が世に問われて10余年になる。その間多くの読者に受け入れられ,専門家および政府からお褒めの言葉を受けることができた。1982年全国優秀科学技術書一等賞,1983年山西省科学技術成果二等賞を受けた。また,中華人民共和国建国35周年に中国革命博物館の重大なる成果の陳列に加えられた。

各界人の言葉に答え,中国医薬学の発展を継承するため筆者はさらに改定を加えてここに『施今墨対薬』を編纂した。

本書の編集,改定の過程で多くの人から支持と協力を得た。とくに祝諶予先生,李介鳴先生には多くの指摘,指導を受けた。ここに深く感謝の意を示したい。

呂　景 山
1995年10月　太原にて

内容概略

一、四〇〇年前の古典『雷公薬対』(徐之才著)の伝統を受け継ぎ、名老中医・施今墨が現代的にアレンジした二味配合法。歴代の経験と自身の臨床経験から得られた貴重な組み合わせを示す。約二九〇対の「対薬」の組成、単味の効能、配合効果、適応症、常用量、臨床応用を記載。

1400年前の古典「雷公薬対」の伝統を受け継ぎ、名老中医・施今墨が現代的にアレンジした二味配合法。約290対の「対薬」の組成、単味の効能、配合効果、適応症、常用量、臨床応用を記載。

著者について(本文より)

先輩(施今墨先生)は詳細な弁証にもとづき巧みに中薬を用いた。「臨床は戦いに臨む軍隊の様なものであり、兵隊の如く薬を用いるべきである。弁証を明確に行い薬物を慎重に選択してその効果を活かすことが必要である。医学理論を知らなければ弁証は困難であり,弁証が明確でなければ治療方法は立たず,薬物をただ書き並べただけでは効果は得られない」と言われた。

古人の治療法は単味薬物から始まったと思われる。いわゆる単方である。その後、薬物を組み合わせて用いることを見出し単味薬物に比較して治療効果が強まることを経験した。その後,七方の分類が生まれるに至った。充分に薬物配伍の効果が経験,蓄積された結果である。

施今墨先生は処方に常に二薬の組み合わせを用い薬物配合を応用した。配合により協同作用を示すもの、副作用が抑えられるもの、長所を引き立たせるもの、相互作用により特殊な効能を示すものなどがあり、これら全てが対薬と称される。私は施先生の処方から百数十種の対薬を集めて北京中医学院で講義していた。呂景山は当時学生でその後、私の助手になり施今墨先生の臨床に立ち会う機会を得た。その後に研究,整理,注釈を加えて対薬の効用を説明する臨床的に有用な本書を著した。北斉の除之才は『雷公薬対』を基にさらに書き加えて『薬対』を著し薬物配合応用の意味を示したが,呂景山の著作は現代の『薬対』ともいえよう。

対薬に関する知識を必要とする人は多いので、この本が出版され、広い範囲の医療関係者に役立ててもらえることを嬉しく思う。

祝　諶予
1981 年 3 月　北京にて

著者略歴（「BOOK 著者紹介情報」より）

呂/景山
1934～。河南省洛陽偃師県人。1962 年度北京中医学院第 1 期卒業生。40 年あまり医業に携わり、高い学術水準、豊富な臨床経験を有している。その優れた業績により、1992 年に政府より特別報奨金を授与されている。山西省中医薬研究院主任医師、山西中医学院教授、山西省針灸研究所所長を歴任。学術面では「施氏対薬」理論を受け継ぎ広め、「針灸穴対」を創始している。内科、婦人科の治療を得意とし、強直性脊椎炎やアレルギー疾患など、治療や診断の困難な疾患に対しても、優れた手腕を発揮している

江崎/宜久
1953 年岐阜生まれ。1979 年東京薬科大学大学院薬学研究科(修士課程)卒業。1985 年薬学博士。1992~1995 年北京中医学院(現・北京中医薬大学)留学。養命酒製造株式会社中央研究所主任研究員

鈴木/元子
1963 年岡山市生まれ。1986 年京都薬科大学卒業。1994 年行岡鍼灸専門学校卒業。1995 年遼寧中医学院中薬研修課程修了。薬剤師

福田/裕子
1946 年長野県生れ。1968 年金沢大学薬学部卒業。1988 年日中学院研究科卒業。寺師睦宗先生の漢方三考塾で漢方を学ぶ。東京・神奈川の中医学研究会に参加。漢方薬局桂樹堂を開設(厚木市)(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)